



# サクラ (桜、櫻)



バラ科サクラ亜科サクラ属。かのソメイヨシノは、花の散る頃に葉芽が伸びるエドヒガン *Cerasus itosakura* の性質と、白い大きめの花で緑の若葉のオオシマザクラ *Cerasus speciosa* の性質を受け継ぎ、江戸期の交雑種であると言うが、成立の過程は不明らしい。明治期から各地に植えられ、外国にも贈られた。横に広がる樹形で、老樹は高い枝先が枯れて落ちる。これら2種を含め、日本に自生するサクラは10種ほどだそうである。近縁の種はヒマラヤから中国、朝鮮半島、日本にかけての温帯地域に見られるとのことで、サクラは日本だけの植物ではない。平安時代以降には、食用のサクランボの生るカラミザクラ (唐実桜、

学校法人中部大学

監事

太田明德



*Cerasus pseudo-cerasus*) の系統も中国から移入されたらしい。山形県特産のサトウニシキは欧米で広く栽培されるセイヨウミザクラの系統だそうである。

日本の土地に適応したサクラは、林間地、河岸、共有地や寺社などの日当たりの良い適地に生育している。人の生活圏の近くにあって、春に花を楽しませ、熟した小さな果実は子等のちょっとした楽しみになり、クマリンの甘い香りを生む葉も樹皮も材も利用されて親しまれてきた。もしもサクラの果実が桃のように大きく美味であれば、また花が牡丹のように格別に艶 (あでやか) であれば、古くから人々に愛されることはなかったかもしれない。サクラゆえの想いが広く人々に共有されて来たために、文芸や工芸・美術の題材となり、国粋思想の鼓舞にも使われてしまった。

中部大学には姿形から見て少なくとも5種類のサクラがある。学園保育所に下る並木道や校門前のソメイヨシノ、1号館玄関脇のたぶんベニシダレ、1号館前の広庭のヤエザクラなどである。留学生寮近くの桜は樹が高く聳え、花とともに伸びる若い葉が赤みを帯びているのでヤマザクラに違いな

い。それに、「御苑の桜」と名づけられた学園創立者胸像の前の実生のサクラ (「学園回想」、大西良三、風媒社2012) は、白い花と緑の葉が一緒に伸びるので、オオシマザクラだろうか。しかし、実が採取された新宿御苑には65種ほどのサクラがあるそうで、品種を知るのは難しい。

筆者の小学校入学記念の集合写真の撮影はやはり校庭のソメイヨシノの花の下であったが、出身地信州の春は遅く、4月半ば過ぎのことで生徒は皆ふだん着であった。時を経て、筆者の子どもの入学式では、所の違いもあって、構内のサクラが満開であった。新しいランドセルを背負った娘は校門を入ると、急に歩みを止め、小さく「胸がどきどきする」と言った。サクラは子どもたちの特別な日の花でもある。

参考)

- ・「桜とは何か：花の文化と「日本」、佐藤俊樹、河出新書2025
- ・「桜の科学」、勝木俊雄、サイエンス・アイ新書2018
- ・「桜の樹木学」近田文弘、技術評論社2016